始まり（底辺１）
主人公の男はある日、病院で目を覚ます。状況がつかめず、こうなった経緯を思い出そうとするが、自身の年齢、出身地、学歴、交友関係は覚えているが、それ以外は全く思い出せず困惑する。するとそこへ医師が入室し、主人公は現在「パーツ欠落性記憶障害」に陥っているという旨を明かす。
「パーツ欠落性記憶障害」とは、一部の記憶だけが喪失され、暫くすれば失われた記憶が戻るが、その代償にそれまで覚えていた記憶が消え、また暫くすれば消えた記憶が戻るが、覚えていた記憶がランダムに消え、また暫くすると…といった形で
不定期に「記憶の取り換え」が起こるものだった。
　現在この記憶障害の明確な治療法は発見されておらず、記憶全てが完全に戻る可能性は０に等しいと宣告され、主人公は絶望する。

少し上がる（頂点１）
「パーツ欠落性記憶障害」を宣告されてから、主人公の元へ見知った友人、家族、恋人が様子を見にやってきて励ましたり、記憶障害のリハビリの手伝いに参加してくれたりと、知人達の行動に救われる。そして徐々に、知らない筈の景色にデジャブを感じるようになり、このまま記憶を保持したまま治るのではないか、と希望を持つようになる。

どん底（底辺２）
そんなある日の事、夢で自分が仕事に明け暮れている日々を見て、これが失われていた記憶である事を理解する。すると突然場面が暗転。次の瞬間見たものは、
　殺人を犯した、記憶であった。
　翌日、見知らぬ人達が主人公の元へ訪れ、リハビリの続きをしようと言う。
　誰だろうか、この人達は。見知らぬ人達は明らかに憔悴している自分を心配し、何かあったのかと聞いてくる。
「あの…あなた達は、どちら様、でしょうか…？」

主人公がそう問うと、見知らぬ人達は皆傷ついたような、悲しげな表情をする。その人達は皆、主人公の友人や家族、恋人を名乗るが、自身にはさっぱり覚えがない。

なによりこの人達を、人を殺してしまった自分の身内にさせるわけにはいかない。

知人を名乗る人達を帰し、主人公は一人（おそらく）自分の部屋で嘔吐し、蹲る。

男は、かけがえのない人達の代わりに、人類最大の罪を抱えて、蹲る。

上昇（頂点2）

暫く自分の事は放っておいてほしいと彼等に伝え、自室に一人引きこもる主人公。

しかし引きこもっている場合ではないと警察署へと赴き、自主する。

取り調べで様々な事を聴かれるが、困った事に自分は「知らない誰か」を殺したという事実以外、何も分からない。主人公は自分が「パーツ欠落性記憶障害」である事を明かした。すると警察から「パーツ欠落性記憶障害には稀に、同症状を患っている他人の記憶が混在する者の症例も存在する」という事を明かされる。勿論医師からも同じ事を伝えられていたが、殺人の記憶を宿した際に、忘れてしまっていたのだ。

更に、重度の「パーツ欠落性記憶障害」で警察精神病院に入院している殺人容疑をかけられている男がおり、その男の記憶の証言が警察の方で調べた主人公の年齢、出身地、学歴、交友関係が一致するとの事であった。なんでも二日前から突然まるで「至って普通の人生を送ってきた普通の人間」の様な振る舞い示し始めたのだそうだ。

二日前とは、自分が殺人の記憶を夢に見た日である。そしてアリバイ的にも、主人公は無罪である事が裏付けられており、そしてその５ヶ月後、殺人犯と自身の記憶が戻り、犯人の男は有罪判決を受け、刑務所へと収監された。

記憶を取り戻すまでの５ヶ月間、自身の者ではないといえど何度も殺人の記憶に苦しんだ。そんな彼を支えてくれたのは、暖かく見守って、時に

は励ましてくれる忘れてしまっていた身内達であった。

記憶を取り戻した今も残りの記憶を取り戻す治療法を確立する為に、支え合いながら、生きている。